
大切に

モロッコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大切にして

【Nコード】

N13630

【作者名】

モロッコ

【あらすじ】

オオカミさんシリーズです。

涼子×亮土で、目線は涼子です。

最近のスランプ気味なんで、大駄文かと思われます。

それでもよければお付き合います。

(前書き)

大駄文ですが、よろしくお願いします。

おかしいな、なんでか亮土のことが頭から離れない。
アイツのことはだいたい前から気にはなっていたけど。

『恋愛感情』というものではなくて、ただいい奴だということだったはずなのに

「涼子ちゃん、何をそんなにそわそわしてますの？」

アイツがいないとなんか落ち着かない。

ただ一緒にいるだけなのに、こんなにアイツのことを必要としていたのか？

アイツがいないと俺はだめなのか？

何を言ってる、俺は一人で生きていくと決めたはずだ。

誰かに力を借りて、それでまた裏切られたら、もう立ち上がる
ができない。

もうあんな思いは、嫌なんだ

「.....」

「あらあら涼子ちゃん、そこまで恋しいんですの？」

「り、亮土のことなんか...！」

「あら。私がいつ、森野君の話をしたんですの？」

「くっ…」

りんごのやつ、分かってて言いやがったな…
でも、そうなのかもしれないな。

今オレ達は学寮の一室で、二人で話をしていた。
最初は他愛のない話で、互いに笑っていたんだけど、
ちよつとした沈黙から、この話になった。

「涼子ちゃん知ってますの？」

「なにが？」

「今学園で面白い賭けごとが行われてますの。」

「賭けごと？」

「そうですね。内容がとても面白くて、涼子ちゃんに物凄く関係が
深いんですの。」

「まさか、亮士のことか？」

「あら、もつ話は廻ってるんですの？」

「…いや。」

りんごがそんなにイキイキと話すのは、オレをからかう時だからな。

認めたくないけど、これはホントの話だけに認めざるを得ない。

「それで？賭けごとの内容ってのは？」

「それがですね…話すことができないんですの、涼子ちゃんだけには。」

「なんでだよ。」

「それは明日辺りにでも分かるんじゃないんですの？」

「なんでだよ。」

「森野君、かなり決心ずいた顔でしたの。」

あの男も討伐したことですし、涼子ちゃんもそろそろ素直になっても平気じゃないんですの？」

「？」

「それじゃあ今日は寝るんですの。」

りんごは最期に意味深な言葉を呟くと、そのまま布団へダイブ、眠ってしまった。

そんな事を言われた時は、オレは当然眠れるわけがない。

「素直に…か…」

あの男のおかげですっと秘め続けていた、『素直』という心。亮士はあんな男ではないと、ずっと思っっているのに。心のどこかではやっぱり不安らしくて、まだ本当に素直になれない。

「…ねよ。」

考えても無駄だと思い、その日は寝ることにした。

次の日、私にとっての運命が訪れた

「涼子さん、今時間あるツスか？」

その日の放課後、オレは亮士に声をかけられた。

「ん？特にはないけど。」

「ならよかったツス。」

ゆっくり話したかったんで。」

心なしか、亮士の顔がいつもと違ったような気がするけど、見なかったことにした。

その後、衝撃の一言をもらったのだ。

「涼子さん。」

「なんだ？」

「俺と、これからもずっと一緒ってのはダメっすか？」

「どづいつ事だ…？」

理解できなかった。

あれだけ恋愛小説を読んでいたというのに、亮士の言葉についていけない。

「ちょっと気恥ずかしいんスけど…」

俺のために隣で、ずっと素直な涼子さんのままで、ずっと笑っていてほしいんツスよ。」

「それってまさか…」

「改めて言っツス。」

涼子さん、結婚してほしいツス。」

その言葉が、私は欲しかったんだと思う。

何よりも嬉しくて、かけがいが無いものなんだと、改めて感じた。だけど、まだ一つだけ不安が残ってて。

「なあ亮士、一つ聞いてもいいか…？」

「なんスか？」

「私の隣から、離れたり裏切ったり…しないで」

「大丈夫ツス。

俺は涼子さんから離れたり裏切ったりするわけないじゃないツスカ。

」

その言葉を聞いて、安心した。

亮土は、私のことをちゃんと考えてくれていたんだから。

「それじゃあ、こんななりだけど。

よろしくな。」

「もちろんツス。」

亮土の胸に飛び込んだ私と、私を抱きしめてくれた亮土。ここに、一つの恋が成就した。

おまけ

「あれはあれで森野君らしいですの」

プロボース
告白現場を目撃したりんごさんは、クラスの女子全員に報告をした
とこ

めでたしめでたし…？

(後書き)

どうでしたか？

よければ感想等、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1363o/>

大切に

2010年10月8日23時23分発行